

Ⅱ 普及奨励及び指導上の参考事項

〔水田作関係〕

1 水稻早中生品種の登熟性と減収率の関係について

1 背景と特徴

地域別栽培条件別冷害危険度の推定、安全作期策定および当該年次における被害量推定の場面で品種の登熟気温と減収率の関係についてのより適切な尺度がのぞまれるが、現行方式では品種特性が考慮されておらず、登熟期間を40日とみなすなど問題がある。たまたま、本年の場合一部の現地から現行方式では、適合がよくないと評価があったので検討を加えた。

(1) 現行方式……青森農試策定(第1図)

出穂後40日間の気温と減収被害の関係

(2) 登熟温度

① 出穂後40日間に880℃の積算気温……完全登熟の条件(田中)

② 出穂後15日間の高温条件としての積算温度350℃(平均気温23℃以上)

出穂期から最低気温10℃(日平均気温15℃)となる以前に880℃の積算気温……

完全登熟条件(八柳)

成熟の終期の限界温度15℃(低温実験室、八柳)

③ 出穂後40日間880℃が完全登熟条件の尺度は

集約栽培条件下の安全作期の決定には有効だが収量に結びついていない。このことから量的作期のみかたからの安全好適出穂期の吟味が必要(羽生)

(3) 成熟期

成熟期は登熟を全うすることが出来る気温条件期間を選んで定めなければならないが、これについては出穂期から成熟期までの積算気温、または一定気温を出現する終日によって表現できる。

2 技術内容

(1) 圃場試験の累年成績から帰納し、シモキタ(早生)、フジミノリ(中生)について登熟期間と減収率の関係を求めた。(第2・3図)

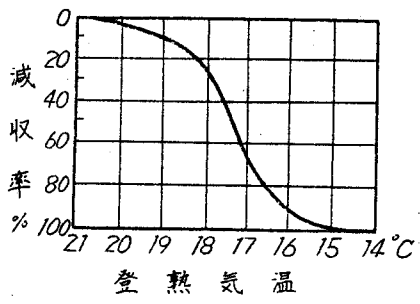
(2) 登熟気温は出穂期の翌日から平均気温15℃以下が2日以上連続して出現する時点の前日までの気温を積算して算出。

(3) 現行方式と新方式との差異は、第4図にしめされる。

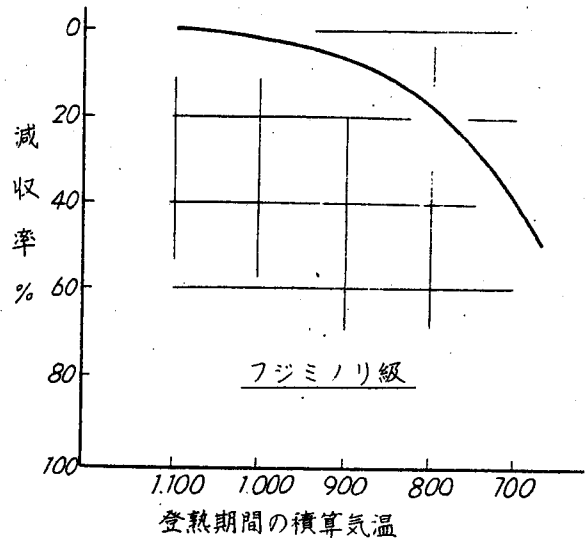
3 指導上の留意点

(1) 県中部以北の当該品種に限定して用いること。

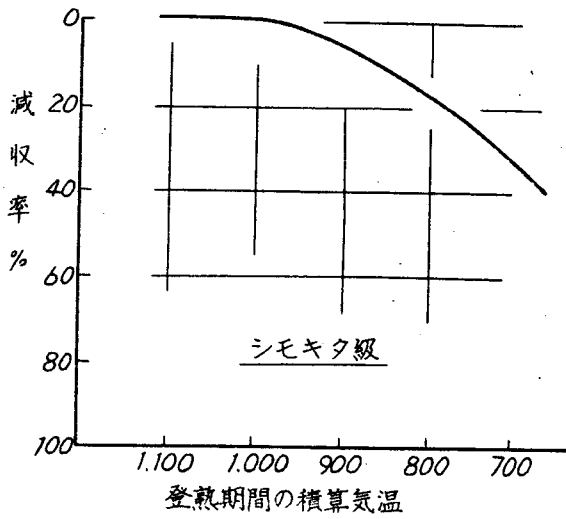
第1図



第2図



第3図



第4図

